

研究・調査報告書

報告書番号	担当
5	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol use, comorbidity, and mortality. 飲酒、併存疾患と死亡率	
執筆者	
Moore AA, Giuli L, Gould R, Hu P, Zhou K, Reuben D, Greendale G, Karlamangla A.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Am Geriatr Soc. 2006; 54(5): 757-62.	
キーワード	
高齢者、アルコール、疫学、死亡率	
要 旨	
<p>高齢者の長期追跡期間中の死亡率に対する飲酒と併存疾患の複合効果について、米国を代表する無作為抽出集団の20年間の追跡調査である、1971-1974年のNational Health and Nutrition Examination Survey I (NHANES I)および1992年のNHANES疫学追跡調査のデータベースに基づき検討した。ベースライン調査時に60歳以上であり、飲酒に関する情報の得られた被験者4691名を本研究の分析対象とした。米国における潜在的に危険な飲酒者の頻度および20年間の追跡期間中の総死亡率に關与する危険因子を評価した。潜在的に危険な飲酒状態は、過去に妥当性が検討された方法により、飲酒量と併存疾患から決定された。分析の結果、1971および1974年の米国における潜在的に危険な飲酒状態にある高齢者は10% (男性の18%、女性の5%)であることが示された。その多く(69%)は、關連する併存疾患の存在のために危険とされた飲酒量を超えて飲酒していること(たとえば、痛風や不安傾向がある、あるいは鎮痛剤を服用しているにもかかわらず、飲酒量がエタノール換算で20-30g/日であるなど)で、定義されていた。男性では、潜在的に危険な飲酒者はそうでないものに比べて死亡率が高かったが(ハザード比1.20, 95%信頼区間1.01-1.41)、禁酒者の死亡率は高くなかった。女性では、禁酒者も危険な飲酒者も死亡率の上昇とは關連していなかった。本研究は、初の地域住民を対象とした大規模調査により飲酒と併存疾患の総死亡に対する危険度を評価したものであり、男性において潜在的に危険な飲酒が高い総死亡率と關連することが示された。したがって、特定の併存疾患を有する高齢者にとって、総死亡リスクを減じるためには、推奨される飲酒量の上限はより少なめであることが望ましいと考えられた。</p>	